

運動有能感を高める小学校体育授業の実践Ⅱ

ー第4学年ゲーム(スポーツ鬼ごっこ)を通してー

(高知スポーツ鬼ごっこ愛好会・鬼ごっこ総合研究所客員研究員) 山崎功一

Practice of elementary school physical education lesson to enhance exercise competence 2 -Through the fourth grade game (sports onigokko)-

Koichi Sports Onigokko Fans Society・Onigokko research institute guest researcher Yamasaki, Koichi

キーワード: 運動有能感 形成的授業評価 スポーツ鬼ごっこ 小学校体育

I. 研究目的

学習指導要領改訂では、心と体を一体として捉え、生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの実現を重視し、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方ができるように配慮されている。

しかしながら、以前より積極的に運動する児童とそうでない児童の二極化への指摘や体力低下傾向が問題となっている。新学習指導要領の内容の取扱いにおいても、「特に、運動を苦手と感じている児童や、運動に意欲的に取り組まない児童への指導を工夫するとともに」と運動を苦手と感じている児童や意欲的に取り組まない児童への指導について追加されている。さらに、「ゲームについては、味方チームと相手チームが入り交じって得点を取り合うゲーム及び陣地を取り扱うゲームを取り扱うものとする」と積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化への指摘を踏まえ、運動の魅力に触れることができるよう、相手との攻防を楽しむ等の指導内容が示されている。

運動に対する愛好的な態度を育むには、児童自らが運動を行いたい、チャレンジしたいという思いを高めること、つまり内発的動機づけを高める必要がある。内発的動機づけを高める視点として、岡澤ら(1996)は「運動有能感」を高めることを提唱している。運動有能感とは、「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子から構成されている。岡澤らは運動有能感の構造を明らかにし、小学校から大学生まで使用可能な「運動の有能感測定尺度」を作成している。さらに、運動に対する内発的動機づけと運動有能感には正の相関関係があるとしている。

そこで本研究は、児童の運動有能感の変容をみるために「運動の有能感測定尺度」を授業で具体的に活用し、その要因を分析することによって、具体的な成果になるのではないかと考えた。そして、運動を積極的にする児童とそうでない児童の傾向を明らかにするために、ゴール型の鬼ごっこを教材化し、単元実践を試みるなかで、分析考察を深め原則を導き出すとともに、その限界性についても明らかにしていくことを目的とする。

II. 研究方法

1. 授業研究

- (1) 対象 2018年度高知市立U小学校4年生1学級とした。
- (2) 教材 ゲーム領域(ゴール型・スポーツ鬼ごっこ)
1単元5時間を対象とした。
- (3) 期日 2018年10月
- (4) 教師 男性教師が授業を担当した。
- (5) 調査項目

① 運動の有能感に関する調査

運動有能感の変容をみるため、単元前後にアンケート調査を実施し運動有能感の変容を整理した。

② 形成的授業評価

毎時間授業終了後に児童による授業評価アンケート調査(9項目・記名)を実施した。

(6) 分析方法

統計処理はSPSS統計パッケージで統計処理した。

III. 研究の結果と考察

(1) 運動有能感に関する調査

単元前後の有能感の変容を表したものが表1である。特に、『身体的有能さの認知』と『統制感』が有意に高まった。また、下位群においては『身体的有能さの認知』が有意に高まっている。以上のことから、スポーツ鬼ごっこが、技能差に関わらず誰でも楽しめ、経験値を増すことで、運動に対する自信につながる事ができたと考えることができる。さらに、下位群においてはやればできるという自信を得たと思われる。

N=22	pre		post		t 値
	平均	SD	平均	SD	
1有1	3.73	1.25	4.73	0.69	-4.387 ***
1有2	4.00	1.09	4.82	0.65	-3.498 **
1有3	4.73	0.54	4.95	0.21	-2.485 *
1有4	4.64	0.57	4.91	0.42	-2.806 *
1有5	4.23	1.20	4.86	0.46	-2.188 *
1有6	4.59	0.72	4.77	0.73	-0.748
1有7	4.55	0.78	4.59	0.98	-0.196
1有8	2.86	1.46	3.23	1.41	-1.164
1有9	4.27	1.21	4.68	1.02	-1.142
1有10	3.95	1.30	4.86	0.34	-3.097 ***
1有11	4.59	0.72	4.91	0.42	-2.309 *
1有12	4.77	0.67	4.95	0.21	-1.283
有能感	4.24	0.13	4.69	0.10	-3.496 ***
身体的有能さの認知	3.64	1.09	4.41	0.55	-3.863 ***
統制感	4.68	0.51	4.93	0.31	-2.822 **
受容感	4.41	0.74	4.73	0.78	-1.347

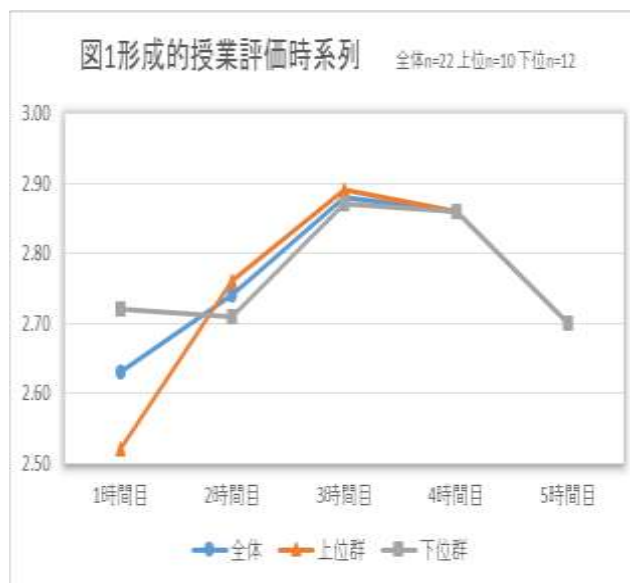
(p<0.05*,p<0.01**,p<0.001***)有意確率(両側)

(2) 形成的授業評価

児童の形成的授業評価を時系列でみると、時数を重ねるごとに向上している。また、すべてのカテゴリにおいて単元前半から、高い得点で推移している。

以上のことから、児童の形成的授業評価は高く推移しており、体育授業に対する愛好的態度が養われてきているといえる。これは、自分たちで作戦を工夫しながら、鬼ごっこを楽しむという学習過程が有効であ

ったと考えられる。また、教師も児童の毎時間の形成的授業評価を把握し、学習につまずいている児童について相互作用を多くとったことも有効であったのではないかと考えられる。



IV. 結論

- 1) スポーツ鬼ごっこ教材においては、児童の運動有能感の高まりがみられる。このことは、技能差に関係なく誰でも楽しめることが運動に対する自信につながったのではないかと考えることができる。
- 2) 形成的授業評価をもとに、毎時間終了後個々の児童の学習状況を把握し、その状況に応じて児童にかかわり、教師との相互作用の頻度を多くすることによって児童の授業に対する愛好的態度の向上がみられる。

引用・参考文献

- [1] 文部科学省(2017), 新学習指導要領解説, 文部科学省.
- [2] 岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996), 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究, 16(2):145-155.
- [3] 長谷川悦示・高橋健夫ほか(1995)小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み, スポーツ教育学研究, 14(2):91-101.